

## 表紙のことば

〈表裏表紙写真〉

川崎地質(株) 中田文雄さん撮影

### 「初秋の会津磐梯山」

2年前の10月、昔住んでいた団地の「歩く会」30人ほどに混ざって磐梯山に登った。この会は、大昔(?)、娘が小学校低学年のとき、学校の夏休みに行われた子供会の旅行がきっかけで発足したものであったが、まとまると素早く、その年の10月には早くも尾瀬に出かけて行った。当時は、職業柄か(?)、山登りに強いとおだてられ、筆者がボッカを勤め、ほぼ全員の昼飯を担いで登ったものである。

しかし、時とともに年をとったのか怠けだし、山へ汗水流して登るよりも、もっぱら夜の時間の方が大切であるという、よからぬ方へ偏向してしまったことは間違いはなく、今は、夕食後みんなで車座になって酒を飲むことが無上の楽しみとなってしまった感がある。

ある時などは、山小屋の親父から「出てゆけ！」に近い言葉を浴びせられたり、別の小屋の親父とは朝まで飲み明かし、山に登るはずが一転して、川で一日中夕涼み(?)をして帰ったこともあった。

磐梯山へ登ったときも、桧原湖北端にある早稲沢の某民宿での夕食後、カラオケ大会が始まってしまい、明日の雨を大いに期待しつつも、このまま帰ったら、みんなに笑われるなあ、などと大いに盛り上がった。

夜が明けると、雲が低いながらもまあまあ天気となり、ある意味でがっかりしたことを覚えている。

猫魔ヶ岳との鞍部にある峠まで小一時間、マイクロバスで送ってもらった後は、重い頭をふりふり気持ち悪いといいながら、山頂目指してゆっくりと登って行った。しかし、登ってしまったらこっちのもので、弘法の清水小屋での昼飯の際には、飯の前にまずいっぱい、それもビールを腹一杯という至福の時間を過ごした一行であった。

題

字

長谷前理事長揮毫